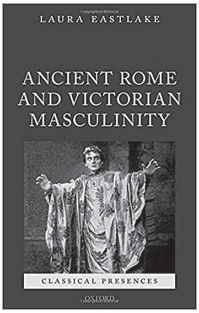
書　評



Laura Eastlake,
Ancient Rome and Victorian Masculinity
(Oxford: Oxford University Press, 2019)

宮崎　かすみ

イギリスのヴィクトリア朝が古代ギリシャやヘレニズムの文化や歴史を受容し、深く影響を受けていたことを明らかにする研究は世にあまたある。ところが、古代世界の両雄の一つにもかかわらず古代ローマとなると、対応する研究はほとんどなかったという。本書はその殆ど未踏の領域に切り込み、ローマとヴィクトリア朝との一筋縄では行かない関係性の諸相をマスキュリニティという視座から説き明かした。しかし本書は、ただ古代ローマとの関係性をたどっただけでなく、それを切り口にヴィクトリア朝の折々の一面を鮮やかに描き出し、骨太にして陰影にも富むヴィクトリア朝社会を見事に再構成している。その複雑な奥深さは、ワーテルローの戦の勝利を祝して1816年にウェリントン将軍に贈られた軍神マルスの彫像と、1883年にニュー・ヨークで撮影されたネロ風の髪型のオスカー・ワイルドの写真の並置に始まる冒頭の記述から、すでに示唆されている。イギリスの理想の男性性と、それとは真逆の逸脱した男性性の象徴ともとれるこれら二つの相反するイメージさえ、単純な二項対立ではないと著者は言い切る。二項対立という図式を拒絶し、「矛盾し合いながら複雑に絡まり合ったローマ受容の歴史的布置」を解明するのが本書の挑むところである。

1. 大人の男を養成する文化装置としての古典教育

本書の構成は、以下のように大きく4部からなる。

Part I.　Classical Education and Manliness in the Nineteenth Century
Part II.　Political Masculinity in the Age of Reform

Part Ⅲ.　Imperial Manliness
Part Ⅳ.　Decadent Rome and Late Victorian Masculinity

各パートは2つの章からなるが、紙幅の都合から省略する。この中で第1部のみ、他の通史的記述から独立しメタな視点から、イギリスの中流階級「男性」のつくられ方が記述される。その要諦とは、パブリック・スクールにおけるラテン語教育であった。イギリスの中流階級の子弟にとってラテン語を学ぶことは男になることとほぼ同義の課題であった。ギリシャ語が上層のエリートになるための古典教養であったのに対して、ラテン語はエリートというよりも男性性を育むための文化装置であった。著者は、少年たちが男性としてのアイデンティティを獲得してゆくプロセスを、代表的な少年小説、*Tom Brown's Schooldays*（1857）や*Stalky and Co.*（1899）の中に具体的に読み込んでゆく。ラテン語が男性性を鍛える鍛錬の一つであったことの端的な例は、*Stalky and Co.*の中で、教室でネズミを放した少年の罰として課されたのが、ヴェルギリウスの詩句を500行書き写すことだったいうエピソードだ。こうした具体的なエピソードを取り上げながら展開される本書の記述には説得力がある。しかしここで評価すべきは、「書くこと」が「戦うこと」と等価な男性性を担っていたことを指摘した点である。一つには、文人の操る言葉がラテン語であることに由来するのだが、これはラテン語や古代ローマが男性性のシニフィアンであったという視点を貫くところから得られた本書の卓見であろう。

19世紀後半に展開された拡張主義的な帝国主義の局面では、それまでよりも身体性や戦闘性を前面に出す風潮が強まっていった。それは戦士に代表される頑健な身体を誇る男性の理想として前景化されていく一方、詩人や政治家が担う知的な男性性も同様に重視されていたと著者は指摘する。ヴィクトリア朝は歴史意識が浸透し、歴史著作が持てはやされた時代であった。それに加えて大量の出版物が流通、かつ識字率の向上により、カーライルの『英雄論』にあるように、文人が新たな英雄として台頭することができた。文人とは、同時代の精神を省察し、後代の人々にとっての価値判断の根拠を提供する人であり、独自の男らしさを獲得するようになったと著者は指摘する。そのうえで、*Stalky and Co.*に描かれている「英雄として

の文人」像を丹念にひも解いてゆく。この作品でストーキーは、新帝国主義の男性性を体現する主人公であり、帝国の兵士として立派に活躍する。その栄達はラテン語の習得に始まり、現地語や文化に精通したことの成果であるが、それが行き過ぎた彼はイギリス人社会から孤立する。他方、戦士である彼を凌駕する男性性の担い手として描かれるのは、近眼で運動音痴の一見冴えないビートルなのだ。作中、一貫して三人称で言及されていた彼は、最後になって突如一人称で語り始める。ここで読者は、物語がすべてビートルによって語られていたことを初めて知らされる。仲間たちの男らしい武勲も活躍もすべて彼が語る言葉によって世に伝わり、後世に残される。作者キプリングの分身とされるビートルは、ここで至高の男性性を発揮するというのである。このような文筆家の男性性を提起する上で、のちに続く章全体の展開をある意味で予告し、多義的かつ多層的な男性性の提起への格好の序章となっている。

2. マスキュリニティと古代ローマの関係の変遷

以下で、第2部以降の内容の時系列的な経緯を簡単にたどる。フランス革命からナポレオン戦争で古代ローマのイメージがフランスで盛んに利用されたこともあり、1830年代からはその過激さゆえに政治的な議論の場から閉め出されていた。この流れを変え、古代ローマを復活させたのは、1860年代、カエサルに心酔する作家、アンソニー・トロロープである。彼は「パリサーもの」(1864–79) と呼ばれる一連の政治小説を書き、古代ローマの理念が当時のイギリス人男性の政治的なメンタリティにいかに深く食い込んでいるかを提示した。その後19世紀末には、古代ローマは剣呑な政治的な議論においてよりも、軍事モデルとして活路を見出し、拡張主義的な新帝国主義の議論に利用されるようになってゆく。

第3部で辿られるのは、18世紀後半から19世紀半ばまでのイギリス帝国主義の発展に伴って移りゆく、モデル・イメージの変遷の歴史である。端的に言えば、通商主義の海洋帝国時代の範であったギリシャから、陸地の征服を主眼とする拡張主義へとその性質を変えた19世紀半ば以降、イギリス帝国主義のモデルは古代ローマとなってゆく。それは、理想とする男

性性のイメージの拠り所が古代ギリシャからローマへ移行したということでもある。スペインやフランスの専制君主国家による全ヨーロッパの制服というスキームが破綻し、またイギリスもアメリカでの覇権を失うなどしたことから、それ以降の帝国主義は東インド会社に代表されるように東洋との交易や通商に軸足を置くことになる。こうした帝国主義には軍事力で征服するローマ帝国のイメージは適合せず、むしろ知力で支配したアテネがモデルとなったのである。特に他国を征服してはその民を奴隷としたローマは専制と退廃のイメージも相まって、ギリシャに比して大きく劣った時代が続いた。ところが19世紀半ばになり、海洋帝国というよりも、征服した帝国の管理や支配、陸地の征服を旨とする拡張主義の性質を強めてゆくにつれ、ギリシャのモデルよりも、征服地と民を文明化するという使命を担っていたローマ帝国モデルが適合するようになってゆく。そうした背景を表現したものとして、ウィルキー・コリンズの*Antonina*（1850）という小説に本書は着目する。この作品は古代ローマの女性とゴート族の青年兵士との恋愛を描いたものだが、二人の間の子供が生まれる前にゴート人青年はフン族に襲われ落命する。だが女性が新しい命を宿していることが仄めかされ、人種混交の可能性が示唆されている。ここで当時のイギリスの理想的男性性が、ローマだけではなくテュートンとの混交として提示されていることが確認される。古代ローマの退廃のイメージをテュートン的素朴さ、健全によって払拭したのである。

この小説で描かれた男性性は、家庭を舞台として描かれてもおり家父長的な性質を帯びていたが、それに大きな変化をもたらしたのはインドの大反乱（1857）である。またその後に続くプロシャの台頭により、それまでの家父長的・自由主義的帝国主義が通用しなくなり、新帝国主義と呼ばれる強権的な支配の様式に取って代わられる。ダーウィニズムと結託した新帝国主義は、闘争と拡張を進化の要因とし、これを怠ることは退化に導かれると唱えた。この時代は、ギリシャやテュートン的な過去を拒絶し、古代ローマにイギリス帝国主義を投影するようになった。極論すれば、新帝国主義は行動を重んじ領土征服への強い野望に取りつかれていた。露骨な領土への欲望は性的欲望というメタファーとして表現された。そしてこの新帝国主義を標榜する者たちが飛びついたのが、クレオパトラという表象

であった。エジプト併合という政治的事象が、カエサルやアントニウスといったローマ帝国の皇帝たちを性的に魅了しながらも征服される、オリエントの領土の象徴たる妖艶な女王への連想を刺激した。彼女はイギリス帝国主義が何としても征服し無害化しなくてはならない他者の象徴であり、征服されるべきオリエントという文脈において、古代ローマの男性性は新帝国主義にとって格好のモデルを提供した。

3. ローマと世紀末の逸脱者たち

軍神マルスとともにネロ風カットのワイルドの記述から始まる本書であるからして、逸脱者を扱う第4部の展開を期待するのは当然である。あまり紹介できなかったが、まっとうな男性性を扱ったこれまでの記述でも、文学テキストの精読から展開される深い洞察はスリリングなほどに刺激的で、一筋縄ではいかぬローマ表象を描く著者の力は存分に発揮されていた。しかし本書の真骨頂はここからである。

ローマ帝国という表象は諸刃の刃であった。軍事力で拡張する新帝国主義を支持するだけでなく、ロンドンの通りを闊歩するいかがわしい洒落者や不良を連想させることもままあった。ギボンの『ローマ帝国衰亡史』に描かれた退廃や衰亡のイメージも広く流布していたからである。こうした退廃の要素は、台頭してきたダーウィニズムによって変質（degeneration）という病理的意味を付与された。腐敗の温床ともみなされた首都ロンドンにもローマは格好の形象を提供した。これを象徴するのは、悪名高き皇帝ネロである。ネロは、キリスト教徒への組織的迫害の他に自分の母親や師のセネカを含む5人の殺害に関与したとされる残虐な暴君である。だがネロは同時に芸術家としての才にも恵まれ、臨終の床で「惜しむらくは我に潜む芸術家の死！」という言葉を遺したことから、帝国統治よりも芸術の価値を重んじる唯美主義者の範として世紀末の芸術家に多数の支持者を得た。無論ワイルドはその一人である。ことに母親殺害の後、その遺骸を目にした彼は美しさに感嘆して死せる母を犯して、近親相姦と死姦という性のタブーを二重に破り、唯美主義と性的逸脱を繋げるのに一役買った。

ネロを支持する一人、ウォルター・ペイターは、古代ローマのイメージ

を使いつつ、そこから唯美主義と退廃の新しいモデルを創り出した。ここでペイターが採用した戦略は、自然という概念を逆手に取ることであった。彼らの男性性を堕落したものとして否定する権力は、ローマの衰亡・没落の相と結びつけて唯美主義者を批難する。しかしペイターは、衰退と没落が自然のプロセスの一環であることを強調し、自然の事物はすべて衰退するのが宿命であるが、息を吹き返して復活するのもまた自然の営みであると考え、作品を通してこの思考を表現した。著者のこの瞠目すべき解釈は、*Marius the Epicurean*（1885）から循環の構造を炙り出す鋭利な精読によって導かれるものである。例えばそれは、唯美主義的影響の次世代への連鎖として、あるいは伝統が変革されまたそれが伝統となるという変化の諸相として。そうした思考を最も体現しているのはフレイヴィアンという登場人物だとする。類まれな美貌に恵まれた彼は、言語における自己鍛錬と技術の習得、愛国心の涵養等により言葉の卓越した使い手となる。因習的な男性性を培うのと同じ要素でもって、彼は言語における男性的美徳を獲得した。早々に病に倒れた彼であるが、その病は変質や衰亡の相におけるのではなく、ローマ軍が勝利と共に持ってきたものなのだった。ペイターは衰退・変質という概念を唯美主義的男性性の自然の一諸相として捉え直すことによって、変質論を転覆したと著者は言う。変質論こそが衰退・変質を遺伝的な病の発現だとして、これを排斥しようとする権力にその口実を提供していたからである。さらにペイターは肉体的強さや戦闘性を美徳とする一般的な男性性を、むしろ皮相的と捉え、容易に獣性へと転落しうる野蛮さと紙一重なものとして突き付けていると著者は言う。

最後にネロの追随者としてワイルドやテオフィール・ゴーティエにも触れられるが、出色のペイター論の後では色褪せて見えるこの部分は割愛する。だからと言って本書の価値が減じるわけでないのは言うまでもない。本書は文学作品の読解を拠り所にした精神史として非常にすぐれた労作である。歴史の骨格は他の歴史家の業績に負い、自ら新知見を唱えようという野心を、この著者はもたない。しかし歴史の文献は非常によく読み込んである。そのうえで選りすぐりの文学作品を文学研究ならではの鋭さで読み込み、歴史的な経糸に対して豊かな陰影と深みをもつ横糸として織り込

む。それが非常に高度なレベルで達成されているのである。文学と歴史の融合が唱えられて久しいが、実際にそれが成功している例は寡聞にしてあまり知らない。しかし本書はそれが成功している稀な例である。それは、歴史事象とそれに対応する文学作品がじつにうまく選択されていることと、歴史と文学作品の扱いのバランスがよく取れていることによると思われる。その意味で、本書は当学会にとっても参考とすべき良書であり、そのような書を紹介できたことは評者としても幸いであった。

——和光大学教授